

海外移住 資料館だより

日本人の海外移住は150年以上の歴史があります。JICA横浜 海外移住資料館では、海外へ移住し、それぞれの国や地域で新しい文明作りに参加してきた日本人移民の歴史と、日系コミュニティについて広く理解を深めてもらうことを目的に、さまざまな資料を展示しています。

■発行元：JICA横浜 海外移住資料館
神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2階
Tel:045-663-3257(代) URL: <https://www.jica.go.jp/jomm>
■編集発行人：JICA横浜 海外移住資料館 館長 中根 卓

沖縄移民企画展示 第二弾

雄飛 ふたたび

—沖縄移民の歴史と
ウチナーンチュの絆

2022年10月29日(土)~2023年2月12日(日)



明治、大正、昭和と急激に世の中が変わる中で、耕地も狭く産業も乏しかった沖縄からは、多くの人々が海外へ移住しました。第二次世界大戦で、沖縄は住民を巻き込んだ戦場となりました。戦後、海外の移民たちは、支援物資を送ったり募金活動を行ったり、荒廃した沖縄救済のために立ち上がります。そして、アメリカ軍の統治下におかれた琉球政府においても、ふたたび、海外への移民政策がとられたのです。沖縄が本土に復帰して50周年を迎えた本年、海外移住資料館では、2014年に沖縄県との共催で実施した特別展示「雄飛-沖縄移民の歴史と世界のウチナーンチュ*」をリニューアルし、企画展示「雄飛ふたたび-沖縄移民の歴史とウチナーンチュの絆」を実施します。

*「沖縄の人」「沖縄出身者」を表す方言

雄飛ふたたび

—沖縄移民の歴史と ウチナーンチュの絆



那覇港から船出する進貢船 「一八七六年 那覇港秋の夕暮れ 迎恩亭」より(部分) (株)ジェイシーシー所蔵

目玉模様も鮮やかな進貢船は、中国との間で長く続いた貿易で活躍した大型船で、大きなものは50メートル以上にもなりました。偏西風に乗って中国に渡り、異国の品々を満載して戻ってくる進貢船は、海外に雄飛するウチナーンチュの象徴でもあります。

沖縄移民のはじまり

四方を海に囲まれた沖縄は、1429(永享1)年から1879(明治12)年までの450年間にわたり、琉球王国として独自の文化を持ち、東南アジア諸国との貿易で栄え発展してきました。しかし、日本の開国、明治維新という大きな流れの中で、1879(明治12)年に明治政府が行った「琉球処分」により、琉球王国は沖縄県として日本に組み込まれることとなります。

金武町出身の當山久三は、当時の沖縄が直面していた食糧問題、人口問題の解決策として、海外への集団移住を計画。これにより、1899(明治32)年12月に、沖縄からはじめての集団移民がハワイに向けて出発しました。この時の移民26名は、約1カ月間をかけて翌1900(明治33)年1月8日にホノルル港に到着し、オアフ島のサトウキビ耕地で契約移民として働き始めます。これが、沖縄からの集団移住のはじまりです。

もともと海洋国家として人々の目が海外へ向いていたこともあり、ハワイを皮切りに移住先は北米、南米、フィリピンなどの東南アジア等へと広がりました。労働環境は過酷でしたが、移民たちは沖縄の家族らへの送金を絶やさず、その総額は一時、県の歳入の6割以上を占めるまでになりました。移民からの送金は、貧しかった当時の沖縄社会にとって、大きな助けとなりました。



金武尋常高等小学校校舎 1925(大正14)年竣工
沖縄県立博物館・美術館 所蔵
鉄筋コンクリート造りの校舎は、海外移民からの巨額の送金を基にして建てられた



沖縄移民の父、當山久三
(金武町當山記念館)

ウチナーンチュの絆が生んだ ボリビアのオキナワ移住地

沖縄からの海外移住が始まって半世紀もたたないうちに、第二次世界大戦(アジア・太平洋戦争)が始まり、沖縄では、県民を総動員した地上戦により多くの市民が巻き込まれ命を落としました。

戦後、アメリカ政府による大規模な軍用地の接収によって農地や宅地が減少する一方で、引き上げ者や復員者で人口が増加し、天然資源も乏しかった沖縄は、深刻な食糧問題に直面します。戦前にボリビアに渡った沖縄移民たちは、故郷の窮状を知ると、貧困に苦しむ沖縄から家族や同胞を呼び寄せようと考え、移住地の確保に乗り出します。

アメリカの統治下にあった沖縄には、1952(昭和27)年に「琉球政府」がおかれましたが、戦前のボリビア移民による同胞救済のための移住地建設案と、沖縄の軍用基地拡大を目指すアメリカ政府の思惑が一致し、その後押しを受ける形で琉球政府はボリビアへの移住計画を推し進めます。1954(昭和29)年6月には、琉球政府による計画移民としてボリビアへ第1陣275人が、翌7月には第2陣125人が送り出されました。ボリビアへは、その後10年間にわたって約3,300人が移住し、「コロニア・オキナワ(オキナワ移住地)」として第2、第3移住地まで発展しました。

南米移住者募集



琉球政府経済局移住課が作成した南米移住者募集のポスター
1963(昭和38)年頃
沖縄県公文書館 所蔵

パスポートにみる沖縄移民のあゆみ (戦前からアメリカ統治時代、日本復帰まで)

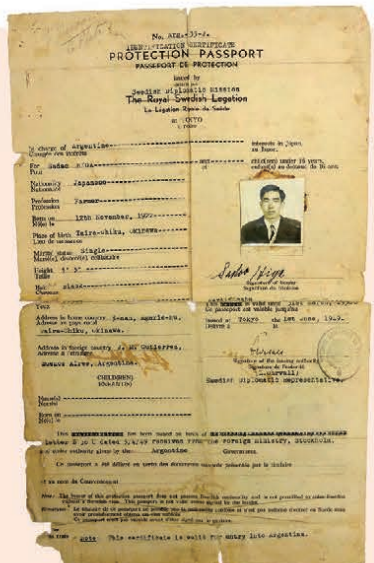
1908(明治41)年、ブラジルへの最初の移民船として知られる「笠戸丸」にも、多くの沖縄移民が乗船していました。乗客781人のうち、実に325人が沖縄からの移民でした。

戦後、沖縄からの移民は、1948(昭和23)年、アルゼンチン

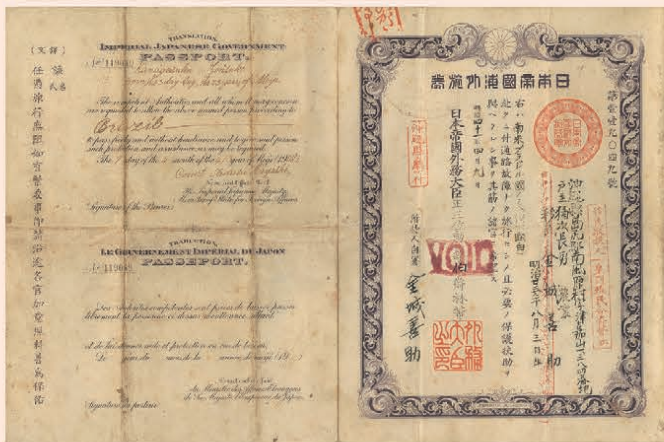
その一方、ブラジルやアルゼンチンなどの受け入れ国で、沖縄からの移民は米国民政府発行の身分証明書で入国したのち、日本の領事館が発行する身分証明書を取得し、日本人として外国人登録をしていたため、問題視され、沖縄移民も日本国民として移住することが求められるようになりました。

1953(昭和28)年以降、沖縄でも日本政府の渡航費貸付を受けられるようになると、同じく琉球列島米国民政府の発給する「日本渡航証明書」を持って神戸まで渡り、神戸で日本のパスポートを所得して移住先国まで渡航する方法がとられました。

沖縄が日本に復帰するのは1972(昭和47)年ですが、那覇で、日本のパスポートが発給されるようになったのは、一足早い1967(昭和42)年のことでした。



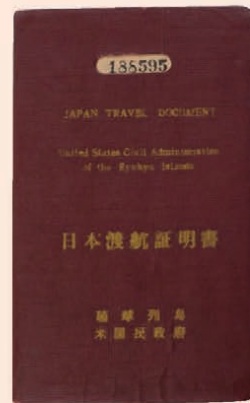
東京のスウェーデン外交代表部により発行された沖縄からアルゼンチンへの呼び寄せ移民の身分証明書
1949(昭和24)年6月1日発行
比嘉アンドレス氏所蔵



第一回ブラジル移民笠戸丸乗船者の「日本帝国海外旅券」
1908(明治41)年 南風原文化センター所蔵

へのいわゆる呼び寄せ移住に始まります。終戦後、連合軍の統治下にあった日本では、GHQ(連合軍最高司令官総司令部)の許可を得た者には従来とは違うパスポートが発給されました。沖縄でも、琉球列島米国民政府により、公務など特に許可を得た者にのみ「旅行証明書」が発給されましたが、アルゼンチンに入国を許可された移民には、利益代表国(戦争などにより断交状態となった国家間において双方の利益を代行する中立国)であったスウェーデンにより、旅券代わりの身分証明書が発行されました。この措置は1948(昭和23)年9月より1951(昭和26)年9月まで続けられました。

1952(昭和27)年、サンフランシスコ平和条約により、日本は主権を回復しますが、沖縄ではアメリカ軍の統治下で琉球政府が発足します。移民には琉球列島米国民政府による身分証明書が発行され、移住先国まで行くことができました。



日本渡航証明書(左)1962(昭和37)年と、戦後ブラジル移民のパスポート1962(昭和37)年
金武町教育委員会所蔵
日本政府の渡航費貸付を受けた移民は、琉球列島米国民政府の日本渡航証明書で神戸にわたり、日本のパスポートを取得してからブラジルへ向かった。

■日本政府の支援を受けられなかったコロニア・オキナワ

戦後ポリビアへの移住は、琉球政府によるオキナワ移住地の他にもう一つ、日本政府の主導で沖縄以外の都道府県から入植した「サンファン移住地」があります。サンファン移住地は、1956(昭和31)年に日本とポリビアとの間で締結された移住協定によって建設され、JICAの前身である日本海外協会連合会と日本海外移住振興株式会社が、移住者の送迎や移住地での支援を行っていました。

一方のオキナワ移住地では、米軍統治下の沖縄からの移住であったことから日本政府の公的な支援を受けることができませんでした。移住者は日本の旅券ではなく、琉球列島米国民政府発行の身分証明書を使って渡航し、琉球政府が独自に沖縄から現地調査職員を派遣して移住者の支援を行っていました。

サンファン、オキナワ両移住



最初に入植したうま移住地に集まる第一次ポリビア開拓団
1954(昭和29年)9月



ポリビア、コロニア・オキナワ入口
1964(昭和39)年コロニア・オキナワ入植10周年記念式典。来賓を歓迎する横断幕が掲げられている

■世界に広がるウチナー文化 カンポ・グランデ市のオキナワそば

沖縄移民が多く移り住んだ地域では、沖縄独自の文化が日本文化として現地に根付いている例が多くみられます。伝統芸能のエイサーやそこから派生した琉球國祭り太鼓、沖縄空手などは各国の日系団体で沖縄移民によって受け継がれ、現地の人々にも受け入れられています。

ブラジル中西部マット・グロソ・ド・スール州のカンポ・グランデ市は、沖縄系移民が多く暮らすことで知られています



公設市場前のオキナワそばのモニュメント



具だくさんの「SOBA」

が、そこではなんと、オキナワそばが市の文化遺産として認定されているのだとか。豚の三枚肉(角煮)やソーキ(骨つきあばら肉)の代わりに牛肉を使ったものもあれば、麺が見えないほど具沢山に盛り付けられたものなど、カンポ・グランデのオキナワそばは、伝統的なオキナワそばとは異なる濃い目の醤油味。沖縄移民たちが大切に守り受け継いできた故郷の味が、市の名物料理「SOBA」として独自の発展を遂げて日系・非日系を問わず現地の人々に愛されているのです。市の公設市場前には、オキナワそばの巨大モニュメントが建てられています。

今年2022年が18回目の開催となった「沖縄フェスティバル」も、現地にすっかり定着したイベントになっています。



第18回オキナワフェスティバル



フェスティバルには、各地の沖縄県人会婦人部が大活躍!900km以上離れたサンパウロ市郊外のピラ・カロン沖縄県人のみなさん

「世界ウチナンチュの日」「国際日系デー」を提唱

2016年の第6回世界のウチナンチュ大会閉会式で、翁長県知事(当時)とともに「世界ウチナンチュの日(10月30日)」の制定を宣言し、その後2019年にハワイで開催された第59回海外日系人大会で制定が宣言された「国際日系デー(6月20日)」の提唱者でもある、比嘉 アンドレスさんと伊佐 正 アンドレスさん。沖縄にルーツを持つお二人が、なぜ沖縄に来て、どんな思いでこれらの記念日を提唱したのか伺いました。



比嘉 アンドレスさん

1974年生まれのアルゼンチン日系2世。JICA沖縄を拠点にUNCウチナーネットワークコンシェルジュ(沖縄県委託事業)として国際交流活動を行っている。



伊佐 正 アンドレスさん

1990年生まれのパルー日系3世。名桜大学国際交流センター国際交流課職員として勤務する傍ら、ラテンダンスの講師としてワークショップ等を主宰している。

比嘉:両親はふたりとも沖縄生まれ、私はアルゼンチン生まれの2世です。フローレンシオパレーラという小さな町で育ちましたが、沖縄移民が多く、人付き合いや食事など日常の中に常に沖縄がありました。どこかの家に行っても沖縄式の仏壇があるとかね。私にとって沖縄は、ぜんぜん遠い場所ではなかったですね。

伊佐:父方の祖母が沖縄出身で、戦前にパルーに移民しました。母は非日系のパルー人です。沖縄に来るまで、沖縄についてはほとんど何も知りませんでした。パルーでは祭りでよくエイサーを踊りますが、沖縄に来てそれが沖縄の文化だったということをはじめて知ったくらいです(笑)。

比嘉:もともと大学の学費を稼ぐために出稼ぎとして何度か日本に来て、福島から北九州まで、日本各地で働きました。十分に学費が貯まったところで、最後に沖縄に寄ってみようということで、親戚訪問とお墓参りのために2週間の予定で沖縄に来ました。2週間が1カ月になり、3カ月、半年と時間が流れるにつれて、沖縄がどんどん好きになりました。将来、沖縄のために、そして海外にいるウチナンチュの仲間のために何かできないかなと思うようになりました。

伊佐:通っていたパルーの日系人学校(ラ・ウニオン学校)を卒業する頃、沖縄の名桜大学との間で奨学制度ができて、声をかけてもらったんです。1年間の留学プログラムだったので、プログラムが終わったらペ

ルーに戻るつもりで沖縄に来ました。

沖縄ではすべてが未知の世界でしたが、本当に温かく受け入れられて、そのおかげでホームシックもなく、どこカラテンの空気と似ているところもあって、本当に居心地のいい場所だと思いました。沖縄の歴史や文化を学ぶうちに、将来は沖縄に残って生活したいという気持ちが強くなりました。1年間のプログラム終了後、試験を受けて名桜大学に正式に入学し、卒業してから現在まで名桜大学で働かせてもらっています。アンドレスさんと知り合ったのも、名桜大学でした。

比嘉:正さんが名桜大学に入学するにあたり保証人が必要ということで、ふたりで東村に住んでいる正さんの親戚に相談しに行ったんです。親戚とはいえ、そのおじさんと正さんはその時会うのが2回目という位の間柄。それなのにおじさんは、私の説明が終わらないうちに「それで、どこにハンコ押せばいい?」って言ってくれたんですよ。感動しました。

伊佐:「わかった。少し考える。」という答えが来るとばかり思っていたので、本当にびっくりしましたね。

比嘉:正さんとふたりで「世界ウチナンチュの日」制定のために働きかけをしましたが、これが制定できたら次はウチナンチュだけでなく、海外で生まれた日系人たちの日も作りたいと思っていました。移民した大先輩たちから受け継いだ言葉や価値観、日系としてのアイデンティティを、記念日をきっかけに再確認できたらいいなと思っています。

比嘉:「国際日系デー」制定の翌年、ブラジルでは、ブラジル日本文化福祉協会が主催して、大規模な国際日系デーの記念イベントが開催されました。大きなホールが観客でいっぱいになるくらいの盛り上がりで、本当に感動しました。

伊佐:ブラジルでは、サンパウロ、ロンドリーナ、リオグランデスールの3つの都市で、国際日系デーが市の条例として定められました。それほどの規模でこの記念日が認められているのは、本当にすごいことだと思います。

比嘉:将来、日本国内でも鶴見などで条例として制定されて、大々的に国際日系デーのフェスティバルなんかが実現できたらうれしいですね。



第6回世界ウチナンチュ大会の閉会式で「世界ウチナンチュの日」の制定を宣言する2人。中央は翁長雄志県知事(当時)

公開講座

沖縄噺家、志いさーさんに聞く、沖縄と移民

NHK朝の連続テレビ小説「ちむらさん」に続き「ちむどんどん」でも沖縄ことば指導を務め、自らも沖縄料理店店主として出演した、うちな～噺家の志いさー(藤木勇人)さんに、沖縄と移民、そして「ちむどんどん」の裏話などをうかがう公開講座を開催します。

戦後、世界各地にいるウチナンチュから故郷沖縄へ550頭の豚が贈られたエピソードや、ラジオ番組で日本全国の沖縄出身者と出会い、ネットワークを築いてきた体験談などをお話頂きます。後半は高座をお楽しみください。

「海から豚がやってきた!世界に広がるウチナンチュの絆」

- 講師: 志いさー(沖縄噺家・藤木勇人)
- 開催日: 12月10日(土) 14:00-15:30
- 会場: JICA横浜 1F会議室1

※定員30名(要事前予約)
※申込方法は当館HPをご確認ください

志いさー(沖縄噺家・藤木勇人)

一人ゆんたく芝居「うちな～妄想見聞録」の沖縄県内・県外公演を中心に、各地での芝居公演を行っている。うちな～噺家と称し「日本の南の島に住む人々の様子を伝えるため、芝居とおしゃべり(ゆんたく)で笑いを交えながら、沖縄出身者、沖縄好きの人にもちろん沖縄を知らない人たちにも十分に理解してもらえる舞台を創っている。テレビレギュラー、沖縄昔話の語りべ、CM出演、劇団客演、映画、ドラマ、ラジオ等に出演、執筆活動も展開中。



ハリウッド俳優のジョージ・タケイ氏が来館!! 記念セレモニー&サイン会とミニ展示を開催しました

9月19日、TVシリーズおよび劇場版『スター・トレック』でヒカル・スルー役を演じた、俳優で日系アメリカ人三世のジョージ・タケイ氏が当館を訪れ、記念セレモニーとサイン会を開催しました。タケイ氏が第二次世界大戦中に経験した強制収容所での生活体験をもとに執筆した著書『敵と呼ばれても』の日本語版刊行記念として来日し、当館でのイベントが実現したのも、大型台風が接近する中、直前まで開催が危ぶまれる状況だったものの無事開催にこぎ着け、会場は集まった多くのファンの熱気に包まれました。



ひとりひとりとゆっくり交流されたサイン会

記念セレモニーの冒頭、『スター・トレック』のナレーション演出で登場したタケイ氏は、出演作品等に関する貴重な資料4点を、当館にご寄贈くださいました。また、1時間にわたってご自身の強制収容所での体験談等をお話いただきました。その後に行われたサイン会では、ファンのみならず温かな交流を楽しめました。

参加者からは、「(講演を聞いて、自分が)日本でいかに幸せな時代に生きてきたかと感じるとともに、タケイ氏や皆様のご活動に改めて敬意を感じました」「ご高齢にもかかわらず、深みと張りのあるお声に聞き惚れてしまいました」「ずっとお会いしたかったので、直接お話が出来て感動しました」などの声が寄せられました。



ジョージ・タケイ氏(右)と当館中根館長



発行:作品社
本体価格:2,000円(税別)
ISBN 978-4-86182-826-3

ミニ展示も大好評!

記念セレモニー&サイン会にあわせて、9月10日(土)~25日(日)の期間には、常設展示場にて、タケイ氏がこれまでに出演した『スター・トレック』の合本や小道具等を展示したジョージ・タケイ ミニ展示も開催。こちらも多くの方にご覧いただきご好評をいただきました。タケイ氏は、ロサンゼルスにある全米日系人博物館の設立にも関わり、今日まで惜しみない貢献を続けておられます。当館の常設展示リニューアルに際しては、映像資料の制作にもご協力をいただきました。本年4月末より常設展示場で公開しているタケイ氏の証言映像は、開館中いつでもご覧いただけますのでぜひご来館ください。



ジョージ・タケイ ミニ展示

海外移住資料館 周辺マップ



- みなとみらい線:**
「馬車道」駅(4番出口)から徒歩約8分
「みなとみらい」駅(クイーンズスクエア方面改札)から徒歩約15分
- JR線・市営地下鉄:**
「桜木町」駅から(汽車道→ワールドポーターズ→サークルウォーク)徒歩約15分
- 市営バス:**「ハンマーヘッド」から徒歩約2分

オンライン座談会

パラグアイの日系社会を知る — 現地のリーダーが考えるイグアス移住地の今後 —

■ファシリテーター:

森 栄梨子氏 (NPO法人自然塾寺子屋 事務局長)
岩谷 寛 (JICA横浜センター専門嘱託)

■登壇者: イグアス市在住者及び出身者6名
11月25日(金) 19時~20時30分

表紙写真の説明

- ①世界のウチナーンチュ大会・前夜祭パレードの様子
- ②ペルーの日本祭りで披露されるエイサーのパフォーマンス (@AELU - Asociación Estadio La Unión)
- ③JICA沖縄で実施した日系社会研修「沖縄ルーツの再認識を通して学ぶソフトパワー活用と地域活性」コースに参加した研修員たち
- ④アルゼンチンの宮里道場で沖縄空手を学ぶ若者たち

- 開館時間 10:00~18:00 (入館は17:30まで)
- 休館日 月曜日(月曜日が祝祭日の場合は翌日) 年末年始(12/29~1/3)
- 入館料 無料

